東南アジア海域における「海浜リゾート」の誕生
―タイ、ホアヒンの事例研究―

豊田三佳（立教大学大学院観光学研究科・准教授）

（１）海浜という社会空間に対する認識

このプロジェクトの着想はヨーロッパ社会における海浜リゾートの誕生の系譜を読み解いたアラン・コルバンの著作「浜辺リゾートの誕生：海と人間の系譜学」(1992)にヒントを得ている。アナール学派で「感性の歴史家」とも呼ばれているアラン・コルバンは『風景と人間』(2002)という著作の中で、空間がいかに人間の解釈により時代と共に変化してきたかを問い、「風景とは諸解釈の錯綜である」と述べているが、ロマン主義の時代に風景に対するヨーロッパ人の感性は大きく変わった。18世紀以降ヨーロッパにおいて、「海浜」という空間は、近代人が自然の力と向き合う社会空間として認識されはじめる。さらに当時の近代医学の知識により「海水」や「海風」に対して新しい価値を見出しはじめた。18世紀半ば、Richard Russell 医師により海水によるセラピー(タラソテラピーThalasso therapy)が健康の維持と回復の為に処方され、「海水浴」という近代的な健康法が英国において普及したため、当時のイギリス人は「治療」を目的に海水浴をしていた。（Walton 1983、2000）このように、近代ヨーロッパにおいては、衛生学や健康学の知識に基づいた近代医学の「権威的」価値と近代人の身体への新しい認識の中で「海浜リゾート」という社会的空間が創出され、近代観光産業発展上重要な役割を果たすようになったといわれている。「海浜リゾート」の生成はまず西ヨーロッパ各地に波及し、その後アメリカ大陸、地中海、黒海に広がった。そして、交易と植民地の拡大に伴い、世界地図のあらゆる地域に渡り、海岸線を変化させた。(Borsay and Walton 2011、Walton 2011) この一連のグローバルな規模での「海浜リゾート」の誕生は人々の海、海浜との関わり方、つまりに海水や海風に対する認識、価値観の変化を意味しており、それぞれの地域の社会的・文化的・歴史的文脈の中で捉えることが重要である。

このレポートでは、東南アジア海域における「海浜リゾート」の誕生という切り口を通して、「海浜」という空間に対する価値認識がその土地の社会的、文化的文脈のなかで、それぞれの時代の政治的、文化的、社会的状況を反映しながら、どのように変化し、展開されていくのかを読み解くことを試みたいと思う。

（２）東南アジアにおける「海浜リゾート」

南洋において、「海浜リゾート」が誕生したのはいつ頃であろうか？植民地化された東南アジア地域で宗主国により形成された最初の避暑地は海浜ではなく、標高1200 ~ 2000メートルの冷涼で乾燥した高原地だった。ヒルステーション建設のもともとの目的は軍事戦略の拠点であり軍隊の駐屯地であったが、熱帯の暑さによる疾病を治療するためのサナトリウムが高原地に建設され、植民者の子弟を教育する施設も造られた。酷暑の季節には宗主国の植民地行政機能がヒルステーションに移動することもあった。ヒルステーションは時代と共に機能が変容し、やがて保養地、避暑地そして余暇空間、リゾート地として認識されていく。(Mitchel 1972) このように高原地はリゾート空間として19世紀に開発されたが、海辺という地理的空間が「海浜リゾート」として認識されたのは20世紀である。

欧米列強の植民地勢力が政治的に及んでいた南洋社会において、海浜に対する社会的価値概念はどのように普及したのだろうか、そしてどのように位置づけられていったのだろうか。このテーマを考察するために、具体的な事例としてタイのホアヒンを調査地として選んだ。ホアヒンはかつて「Samor Riang (row of anchors)」と呼ばれていた。海に面したこの地域に移住した人々がボートの錨を停泊させたところという意味である。その後、この

村は「Lam Hin　(stone cape)」と呼ばれていたと言われている。ラーマ５世の治世下(在位1868-1910)に王族のNares王子がロシアの貴族と狩猟旅行でこの土地を訪れて気に入り、「Lam Hin 」村の南の海岸に面した土地に別荘 (The Saen Samran Royal Residence)を建てた。彼はその海浜を"Hua Hin"と名づけ、1911年「Lam Hin (stone cape)」は正式に「Hua Hin (stone head)」という名称で呼ばれることになった。つまり王族の保養地という社会的認識が海岸に対する評価を変化させ、ホアヒンHua Hinの「海辺」の風景に対するヒエラルキーを生み出し、保養地という社会的空間としてタイの人々は価値を見いだすようになる。英国のブライトンにおいても類似した歴史的経緯がある。英国南東部のブライトンは鉄道が開通する以前、廷臣、外交官や大臣など政府の高官たちが夏季に時間を過ごす避暑地として発展した歴史のある町である。王族保養地として海浜に別邸を建設したことが後に「海浜リゾート」として発展する発端になっている。

（３）タイの人々にとっての海域空間

しかしながら、「海浜」に対する社会・文化的価値の変遷を解明するためには、まず植民地帝国の影響を強く受ける近代化以前にタイ社会の現地の人々がどのように海水、海を位置づけてきたのかを確認する必要がある。14世紀半ばから18世紀末まで栄えたアユタヤ朝(1351-1767)は河川の河口部につくられた典型的な『港市国家』であった。近代以前の東南アジアにおいて海は国家経済の基盤である交易ネットワークをつなぐ経路の役割を果たしていた。大きな船が往来できる川幅をもつ大河川のチャオプラヤー川はまさに「メナム（タイ語で“母なる水”）川」で、国家の繁栄はチャオプラヤー川から海へと繋がる交易に依存していた。多くの運河が建設され、「東洋のヴェニス」と呼ばれたといわれている当時アユタヤ朝は日本、琉球、マラッカ王国、アラブ・ペルシャ、西洋と海でつながり優れて国際的で独自の華やかな文化が生まれた。その一方で、後背地である農村地帯は米の供給地で、農村社会の余剰生産であるコメがアユタヤ朝の経済を支える最大の輸出品目で、輸出米は中国の南部で消費されていた。石井米雄はタイ人を「水の民」と呼んだが、その所以は水を征服するのではなく、水の恩恵と共に生きるタイの稲作の方法にある。（石井米雄1975）タイの年中行事には水に纏わる祭事（ソンクラーンの水かけ祭り、ローイ・クラトンの精霊流し）が多く、７つの頭をもちコブラをかたどっている「ナーガ」は水信仰のシンボルで、寺院の参道の手すりなどに用いられていることからも「水」と共生する人々の暮らしがわかる。

ナーラーイ王(1656-88)以降、アユタヤ朝は白人国家に対して鎖国を行ったが、中国船との交易は続けたため、タイ社会における「交易経路としての海」という認識に変化はなかったようだ。さらに清朝は中国人のタイへの入植を促したため、華南地方からの中国人移民が増加した。モノだけではなくヒトの経路としても海は要となった。アユタヤ朝が崩壊した後のトンブリー朝時代のタークシン王も潮州人（中国名：鄭昭）で、両親の故郷である潮州地域からは大量の華人がタイに流入した。その後、チャックリー王朝を創設したラーマ１世は、チャオプラヤー川を挟んでトンブリーの対岸にクルンテープ（現在のバンコク）を建設(1782)したが、ラーマ１世の母親は中国人であったことが知られている。このようにタイの歴史をたどると湾岸は表舞台で、文化融合の社会空間であり、複合的な文明が育ち、栄えたことがわかる。

この研究の現地調査(2015年8月)で訪れたラーチャブリー地区のメークローン川沿いのバーンコティは1840年代に華僑の９世帯が川沿いに移住し村を形成し始めたのが始まりと言われる。バンコク南部地域に仏領インドシナに駐留していたフランスの伝道師によりこの地にキリスト教が伝わったのも川に面していたからであった。聖母生誕大聖堂(The Nativity of Our Lady Cathedral)は、1890年にフランス人伝道師パウロ・サルモン神父が建設を開始し、1896年2月2日に落成したと言われているが、この大聖堂のステンドグラスは当時フランスから直輸入された洗練された作品である。

写真１：ラーチャブリーにある
聖母生誕大聖堂

写真２：聖母生誕大聖堂の内部

写真３：聖母生誕大聖堂のステンドグラス

（４）タイの王族と離宮の建設

19世紀末、シャム王国で初めて運航した汽船はチャオプラヤー川に沿ってタイランド湾を下り、各所で停泊しながら、マレー半島、そしてシンガポールに向かった。The Siam Orasumpholと呼ばれるこの汽船により王族は快適で便利に船旅をすることが可能になった。この汽船ルートである迂回先のバンコク以南の海岸部の小さな村々は発達した。

イギリス、フランス、アメリカなど欧米諸国と外交関係を結び、西洋との自由貿易を再開したのはラーマ４世(King Mongkut　在位1851-1868)である。47歳で王位に就くまで27年間仏法修行者として僧院生活を送ったので、出家者という立場（一種の治外法権的存在）ゆえの異国の知識人との交友が可能となり、その間アメリカ人宣教師から習得した英語とラテン語を武器に、積極的に西洋文明を学び、フランス人神父パルゴアと交友があったことが知られている。（石井米雄 2015）1859年に建立されたラーマ4世の離宮はペッチャブリーのカオワンの丘の上にあり、1972年にPhra Nakhon Khiri Historical Parkとして指定された。現在は国立博物館の支部として整備されている。離宮はバンコクのワットプラケオ寺院に模倣された建築であるがヨーロッパのデザインも融合されている。

写真４：ラーマ４世離宮
プラ・ナコーン・キーリー歴史公園

写真５：ラーマ４世離宮
プラ・ナコーン・キーリー歴史公園

この離宮には天文台がある。天体観測はラーマ４世の幼少期からの趣味であったといわれる。ちなみにラーマ４世のイギリスへの使節派遣に関して以下のような記述が残されている。「（ラーマ４世の）一行はロンドンからバーミンガム、マンチェスター、リヴァプール、シェフィールドまで足を伸ばして、各市長や産業界の人士たちの歓待を受け、数々の工場や商業施設を訪れ、最先端の機械設備や生産工程を熱心に視察した。彼らは『ブリタニカ百科事典に扱われているすべての項目を熟知しているかのようだ』とイギリスのジャーナリストを驚嘆させたほどに、ヨーロッパの科学や工学の多分野に及ぶ知識を行く先々で披露しながら、その上に科学書と機器類の膨大なコレクションを土産に買い込んだ。買い物の中には、モンクット王（ラーマ４世）のための、最新発明品だという天文機器もあった。」(PP45:vol.27,115-245, 石井米雄2015)　ラーマ４世は天文学に造詣が深く、日蝕の発生する日を西洋の科学者と共に計算し、日蝕観察を目的に1868年、最愛のチュラーロンコーン王子を伴い、プラチュワプキリカンを訪れている。しかし、その時にマラリヤにかかり、ラーマ４世はバンコクに戻った後、まもなく病死された。

写真６：ラーマ４世離宮の天文台

父ラーマ４世の崩御の後、15歳で即位したチュラーロンコーン大王（ラーマ５世 Phra Ram Ratchaniwet 在位1868-1910）は、バーン・ブエン宮殿と呼ばれる離宮を1910年に建設したが、この建築家はドイツ人であった。幼少の頃からイギリス人女性の家庭教師から英語と世界の事情を学んでいたチュラーロンコーン大王は、イギリスとフランスの植民地勢力の進出がタイを挟んで対峙した時にタイを緩衝国として位置づけることでバランスを保ち、植民地化を免れて独立を全うすることに貢献した聡明な君主として広くタイ国民から敬愛されている。現地調査でバーン・ブエン宮殿に連れてきてくれたタイ人運転手も、宮殿の正面にあるチュラーロンコーン大王の肖像に対して膝間付き、床に額がつきそうなくらい深々と頭を下げて、敬意を表していた。

チュラーロンコーン大王はタイを近代国家へと導くために、近代的教育制度を確立し、鉄道、道路、水道、電信、郵便などの交通通信インフラ整備にもとりかかったが、この一連の近代化改革の中でバンコクからホアヒンへの鉄道も着工している。

写真７：バーン・ブエン宮殿

写真８：バーン・ブエン宮殿

（５）鉄道建設と「海浜」の別荘地

1911年バンコクからホアヒン行きの鉄道が完成した。それまでこの土地は「Lam Hin」と呼ばれていたが、公式に「ホアヒン Hua Hin」と名付けられた。チュラーロンコーン大王(ラーマ５世)のもとで公共事業省の大臣であったNares王子（Prince Krom Phra Naresworarit）がThe Saen Samran Royal Residenceを建てたのに始まり、Tewawongworapakorn王子もBan Plub Paと呼ばれるバンガローを建築した。これをきっかけに、タイの王族、貴族やなどバンコクの特権的上層階級の人々がホアヒンに別荘を建てることになる。

1916年にはバンコクと英領マレーシアをつなぐ鉄道が開通した。当時はバンコクからシンガポールまで鉄道で、３日間以上の時間がかかったため、中継地であるホアヒンで１泊か２泊して体を休めてから、さらに鉄道の旅を続けるというのが旅のパターンであった。そのため、簡易な宿泊施設がホアヒンの駅の近くに建設されていた。しかし当時の旅はそれほど快適なものではなかった。旅をするためには宿泊場所や設備や使用人を自分で準備する必要があり非常にコストが高くついたため、鉄道の旅ができるのは特権的階級の人々に限られていた。

写真９　現在のホアヒン駅

（６）鉄道ホテルの建設と海浜リゾートの誕生

1921年、鉄道局は鉄道局の取締役であるPurachatra王子の指示に従い、木とレンガで造られたヨーロッパ風の２階建ての鉄道ホテル(Railway Hotel)をホアヒンの海岸に面した立地に建設するようにイタリア人の建築家であるMr. A Rigazaiにデザインを委託した。ベランダは、ベランダに立ったゲストが日差しからは守られながら海風に当たることができるようにデザインされており、雨水はタイルを伝って後方に流れる構造になっている。

写真１０　現在も復元されている鉄道ホテルのベランダ

写真１１：鉄道ホテルは現在のCentara Grand Beach Resort & Villa Hua Hin

このホテルのオープニングは1923年1月1日であった。当初の鉄道ホテルには部屋が14室、ロビー、バー、レストラン、ビリヤード室、ワイン貯蔵室、ベランダなどが備えられ、この建設費用には128,366.74バーツという莫大なお金が費やされたと言われている。レストランにはヨーロッパ人のマネージャーが配置され、西洋から取り寄せたグルメな食材で調理されたものが、優美な陶器の器にのせられて提供された。ヨーロッパに特注した“the State Railways” の記章が刻まれた当時の食卓用銀器類は現在もホテルのロビーに展示されている。

写真１２：当時の鉄道ホテルのロビーの趣が再現されている

鉄道ホテルのオープニングに伴い、鉄道局はバンコクからの臨時列車を週末に運行し始めた。ホアヒンでの滞在を楽しむ旅行者の増加の需要に見合うように、ラーマ６世（在位1910-25）はスコットランド出身の道路管理の技師であるA O Robinsにロイヤルホアヒンゴルフコース(9ホール, 3000ヤード)とテニスコートの設計も委託している。こうして、ホアヒンはバンコクに滞在する上層階級社会の人々の「避暑地」として発展した。1924年には鉄道局に広報課が設置され、周辺国に駐留している外国人やタイの上層階級に向けて鉄道を利用した旅行を促進するためのポスター、パンフレット、ガイドブックなどが発行され

た。ホアヒン滞在の魅力として謳われていたのは、ホアヒン海浜での「『海水浴』という海水治療」、当時の「オリエント（東洋）において最上の品質を誇るロイヤルホアヒンゴルフコース」、さらに「豹や鹿、野ウサギや鳩の狩猟ができる」ことであった。

（７）タラソテラピー療養地としての海浜

1923年　フアヒンの町から北へ12キロに位置するペッチャブリー県チャアム群に当時、宮廷で仕えていたイタリア人の建築家のデザインしたマルカターイヤワン宮殿 (Phra Ratchaniwet Mrigadayavvan)が建立されたが、この宮殿は関節リウマチに悩まされていたラーマ６世(King Vajiravudh　幼名ワチラーウット　在位1910-1925) がバンコクの湿度の高い気候から逃れる治療のための療養地であった。海からの潮風が宮殿全体に旋回するようにデザインされた建築で、２階建ての海浜に面した長い廊下を素足で歩いていると気持ちのいい海からの潮風が吹き抜ける構造になっている。この良質なチーク材の廊下は海辺まで伸びており、夕刻には「海水浴」という海水治療をラーマ６世が行っていたという解説がされていた。ラーマ６世が海辺のオゾンを含んだ大気が治療に良いという西洋近代医学の知識、価値認識を踏まえてこの宮殿を建築したことは明らかである。

ラーマ６世は、12歳の時に渡英し、９年間にわたりイギリスに滞在した。オックスフォード大学で、歴史学や法律学を学んだが、文学や演劇にも造詣が深く、文才に長けておりシェイクスピアの戯曲をタイ語に翻訳して、自ら演技したことが知られている。イギリス留学中に当時「海浜リゾート」として著名なブライトンを訪れ「海水浴」という近代的な健康法を実体験している可能性は高いと思われる。ラーマ６世は長期にわたる留学の経験から、近代国家に必要なのは近代的諸制度のみならず、国民文化形成の重要性にも気づいており、民族意識の鼓舞やスポーツの振興などの諸策もおこなっている。社交文化の重要性もイギリス留学時代に学んだと思われる。「海浜リゾート」という社会的・文化的空間をタイに誕生させるにあたり、ラーマ６世の貢献は大きかったといえるだろう。しか

写真１３：マルカターイヤワン宮殿　２階立ての長い廊下

写真１４：マルカターイヤワン宮殿 海岸へと続く廊下

写真１５：マルカターイヤワン宮殿 入り口

しながら、鉄道ホテルなどへの豪華絢爛な出費は国家財政の大幅赤字を生み、財政危機を次世代に積み残してしまった。

マルカターイヤワン宮殿は現在ラーマ６世軍事キャンプ内に位置しており、身分証明書なしでは入園することはできない。さらに、服装規制チェックがあり、短パンや肩、腕の出ている服装の場合は、肌を覆うサロンの布を身につけることが義務付けられている。ラーマ６世は晩年の1924年にスワッタナー妃と結婚し、崩御前日に王女をもうけたが、マルカターイヤワン宮殿内にはスワッタナー妃が当時使っていたとされる部屋も見学できるようになっている。

（８）ホアヒンブランドの変遷

13歳でイギリスに留学し、イートン校で中等教育を終えた後、軍事学を修めたのち帰国したラーマ７世(King Prajadhipok)も、ホアヒンの中心部から北へ３キロの海に面した位置にスペイン風建築様式の宮殿を建立(1926年)した。ラーマ７世は即位した時点で財政危機を引き継いでいたため、即位後は５人の王族から成る最高顧問会議を設置し財政危機に臨んだ。しかし行政改革による官僚層の不満の矛先は王政に向けられ、その一方で立憲制への移行を考慮すると最高顧問会議から反対されるという板挟みに悩まされていた。心配が尽きることのない日常をバンコクで過ごしていたためこの離宮をクライカンウォン宮殿(Phra Ratchawang Klai Kangwon タイ語で "心配ごとから遠くはなれた宮殿" と名付けた。このクライカンウォン宮殿(Phra Ratchawang Klai Kangwon)は、現国王のラーマ９世（在位1946-現在）の治世下においても王族の別宅として利用されている。

1926年にヨーロッパから輸入された寝台特急列車がバンコクからマレー半島へ運行するようになると、鉄道の利用者は４倍に増えたといわれる。そしてホアヒンの位置付けが変わった。シンガポールに向かう途中下車のための休憩地点ではなく、ホアヒンを目的地として訪れる客層が増加した。ホアヒンの海岸に別荘やバンガローを所有することはバンコクの富裕層が社会的ステータスを示す証となり、ホアヒンという土地は、タイ人富裕層の『避暑地』としてのブランドが確立された。

戦後マスツーリズムの浸透により海浜リゾート産業は発展した。タイにおいても特に1960年代70年代に外国人向けの海浜リゾートの開発が進む。 "sun, sea, sand and sex（太陽、海、砂、sex)" を求めてタイを訪れる旅行者が急増した。中でも、パタヤビーチはベトナム戦争の時期にアメリカ兵のためのR&R(Rest & Recreation 兵士慰安地)として開発され、急速に発展した歴史がある。一方でホアヒンは、王族や高級官僚の保養地という歴史背景からタイ人のための上層・富裕層向けの品格のある保養地として位置づけられてきた。そのため、パタヤビーチとは一線を画した発展をしている。旅行者を相手にした海岸でのマッサージ師によるサービスは許可されておらず、エンジン音のするマリンスポーツも禁止されているため、波のさざ波に耳をすまし、海風に吹かれることができる落ち着いた海浜景観が保たれてきた。

写真１６：ホアヒンの海浜

1980年代には、ホアヒンにも外国資本が入り込み、大規模なリゾートホテルが建設され、ホアヒンの再開発が進む。その過程においてホアヒンはもはやナチュラルなビーチではなくアーバンビーチに変容していく。(Smith 1991) かつての鉄道ホテルはSofitelグループにより改修された。しかし、現在もこのホテルで働いている男性はカーキ色の膝丈のショーツに、真っ白な木綿のシャツを着て、カーキ色のヘルメットを冠るというコロニアル調の制服を着用している。タイは緩衝地帯に位置していたため、直接的な植民地支配は免れ独立を維持した歴史がある。にもかかわらずタイ王族によりデザインされたコロニアルな要素が、現在はホアヒンの観光資源として再構築されている。

写真１７：Centara Grand Beach Resort and Villas Hua Hin の制服

1990年代のバブル期には高層マンションが多数建設され、かつての落ち着いた保養地の風景は失われる。ホアヒンはタイ人のみならず、在タイ外国人が引退後の居住先としてもブランド力を発揮しており、近年は外国人ロングスティ用のマンション開発も進められている。高速道路の建設がすすみ、交通手段は車が主流になりバンコクからホアヒンへ行くのに公共の交通機関である鉄道を利用する人はあまりいない。鉄道の運行数もかなり限られている。にもかかわらず、2015年にホアヒン駅はタイの観光地トップテンに位置付けられた。それはなぜだろうか。王族にゆかりのある土地としてのホアヒン駅のプラットホー

写真１８：ホアヒン駅王族専用の待合所>

ムには王族専用の待合所が設置されており、その写真を撮るために観光客が訪れる。ホアヒン駅は「タイで最も古い王族にゆかりのある海浜リゾート・ホアヒン」を象徴的に体現している空間だからといえるだろう。

2014年５月のクーデターにより陸軍総司令官のプラユット・チャンオチャが政権を握った。軍事政権が「不敬罪」の摘発を強化している状況の中で、ホアヒンという「王族にゆかりのある社会空間」は新しい局面を迎えている。ホアヒンの郊外にある広大な陸軍所有地には王制賛美を目的としたラチャパック公園が開設された。フィールド調査で現地を訪問した時（2015年8月7日–14日）は陸軍下士官学校内に併設されたこの公園に７体の歴代国王の巨大な銅像の建造が進められていた。

参考文献

石井米雄(1975) 『タイ国：ひとつの稲作社会』創文社

石井米雄(2015) 『もうひとつの「王様と私」』めこん

十和田朗・渡辺貴介・安島博幸「明治・大正期における湘南および房総地域の臨海部別荘地の成立過程」(1985) 『都市計画　別冊』20　日本都市計画学会pp.331-336

アラン・コルバン (2000)『レジャーの誕生』藤原書店

アラン・コルバン (2002)『風景と人間』藤原書店

アラン・コルバン(1992)『浜辺の誕生：海と人間の系譜学』藤原書店

キャスリン・アシュンバーグ(2008)『不潔の歴史』原書房

ヴァージニア・スミス (2010)『清潔の歴史』東洋書林

Borsay, Peter and John K. Walton (2011) *Resorts and Ports: European Seaside Towns since 1700*. Bristol: Channel View Publications

Mitchel, Nora (1972) *The Indian Hill-Station: Kodaikanal*. The University of Chicago

Smith, Russell Arthur (1991) 'Beach resorts: A model of development evolution' *Landscape and Urban Planning*, Vol.21(3):189-210

Walton, John K. (1983) *The English Seaside Resort: A Social History 1750-1914.* New York: St Martin's Press

Walton, John K. (2000) *The British seaside: Holidays and resorts in the twentieth century.* Manchester: Manchester University Press

Walton, John K. (2011) 'Seaside tourism and environmental history' in Genevieve Massard-Guilbaud and Stephen Mosley (eds.) *Common Ground: Integrating Social and Environmental in History*, Cambridge Scholars Publishing